様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2013～2017
課題番号：２５２８４０４６

研究課題名（和文）芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary Studies for Formulating the Common Grounds between Art Theory and Art Therapy

研究代表者
川田　都樹子（KAWATA, TOKIKO）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：００２３６５４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　11,300,000円

研究成果の概要（和文）：　2018年に成果報告の論文集を発行した。そこで各執筆者によって語られた通り、芸術学と芸術療法の共有基盤を形成するためには、第3の視点、例えば「社会改革的な福祉」の視点が必要であることが分かった。
　甲南大学人間科学研究所内に、アートセラピストの連携や情報交換を行う場として「甲南アーツ＆セラピー研究会（KAaTsg）」を創設した。また、地域住民を対象とするアートワークショップを行う「甲南アトリエ」を開設した。これは、芸術療法士と芸術家と芸術学研究者が協同で企画運営するものである。

研究成果の概要（英文）：　In 2018, we published a collection of papers, “Research Results Reports”, in which each author insisted the necessity of a third aspect such as "Social Reform Welfare" in order to formulate the common foundation between Art Theory and Art Therapy.
　We founded “Konan Arts and Therapy Study Group (KAaTsg)” in Konan Institute of Human Sciences to collaborate and exchange information on art therapists. And we opened “Konan Atelier” which was planned and conducted by the association of the art therapists, the artists and the researchers of art theory.

研究分野：芸術学

キーワード：芸術表現　芸術療法（アートセラピー）　医療の歴史　アウトサイダーアート　アール・ブリュット　障がい者福祉　美術史　臨床美術

１．研究開始当初の背景

（１）芸術療法（アートセラピー）は、精神医療・心理臨床の領域をはじめ、様々な場所で実践され始め、「アートセラピー」なる用語は一種の流行現象にさえなりつつあった。芸術創造や芸術観賞にも「癒し」を求める傾向が多々見うけられるようになっていた。

（２）同じ「芸術」を扱うものでありながら、芸術学と芸術療法の間には真の対話が成立しないまま、それぞれが別領域として発展してきた。セラピーでは、治療に関わる作品制作のプロセス、特にその内発的・表出的契機が重視され、他方、芸術学では、すでに完成した作品を基点とするものが多く、とりわけ美術史学では、先行作品からの影響や、時代思潮あるいは社会制度等からの影響関係を重視する傾向があり、芸術学的な作品解釈において精神分析学や心理学からの概念の援用がなされることはあっても、臨床の現場で重視される点はむしろ等閑視されていた。

（３）しかし、芸術学における新しい方法論の模索が徐々に進められつつあり、また、アートセラピーにおいても新たな潮流が生まれつつある。今後、この両領域の間での対話・交流の重要性が増していくに違いないと思われる。

（４）研究代表者は、研究分担者・連携研究者らとともに、甲南大学人間科学研究所を拠点として、本課題採択以前よりすでに５年間にわたる研究事業（平成 20～24 年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業）の一環として、哲学的視点や美術制度論をも含む学際的立場から芸術療法の実践を現状分析し、またその歴史的展開を検証する基礎を確立していた。

２．研究の目的

（１）上述の、過去５年間の研究を基盤として、その上に、美学・美術史といった芸術学と、臨床心理学に根ざした芸術療法（アートセラピー）の知見との創造的対話を確立することを目的とする。

（２）歴史研究として、臨床家がセラピーに作品制作を導入するようになった経緯や、芸術家がセラピー的な方法にアプローチしはじめた歴史的プロセスを明らかにする。

（３）芸術療法と、その隣接領域（例えば精神科医療における芸術の利用、障害者福祉施設における芸術創造、現代芸術におけるセラピー的効果）の関係を明らかにし、芸術学的アプローチの可能性を探る。

（４）芸術療法の諸相の現状を把握し、芸術学と芸術療法の交流と、その実践のための「場」とネットワークを創出する。

３．研究の方法

（1）芸術理論と芸術療法の架橋のため、芸術学研究者とセラピストのみならず美術館学芸員、精神科医、美術批評家など多彩な構成員からなる研究ネットワークを構築し、それを活用して、各研究者が文献研究等により、これまで病や治療に関する言説がいかにして構築されてきたか理論的に考察した。

（2）国内・海外でのフィールドワーク、インタビュー調査により、芸術療法とその隣接領域の歴史を検証し、また現状を把握した。

（3）上記（1）（2）によって蓄積・整理した情報に基づき、定期的な研究会・シンポジウム・講演会を甲南大学人間科学研究所にて開催し、異なる専門領域の研究者の間での意見の交換をおこない、学際的研究を進めた。

（4）芸術を用いる精神医療とその治療に関するリテラシーの向上を図る場として、人間科学研究所において、アートワークショップの実践プログラムを定例化する。

(5) 上記（1）～（4）の個々の成果は、研究メンバーによって国内外の学会や学術雑誌、図書の出版によって随時発表していく。

４．研究成果

(1) 本課題の研究成果は、『科研「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」成果報告書』として研究分担者・連携研究者・研究協力者の論考をまとめて発行した。これは、2018 年度中に、さらに内容を増補・整備して、あいり出版より市販本として出版する予定である。

(2) 歴史の検証から、芸術学と芸術療法の間に、なぜ現状にみられるような「溝」ができたのかが分かってきた。“Art Therapy”という言葉の創始者は、医師でも心理学者でもセラピストでもなく、1930 年代末に結核患者としてサナトリウムでの長期療養を余儀なくされた１人の画家（Adrian Hill)であり、最初は患者たちの「気晴らし」のために病院内で「画塾」のようなものを開いたのだった。しかも病院内での「名画鑑賞」も同時に広めていった。やがて、そこに治療的効果が認められ、医療と結びついていく。

しかし、第２次世界大戦後、その組織化・制度化が進められていく中で、「治療（セラピー）」としての効能に主眼がおかれるようになると、創始者たち（芸術家たち）は、組織・制度から排斥され、反目していった。また、芸術界でも、「セラピー」に関わる画家は、「アヴァンギャルド」としての芸術的価値を放棄し、芸術の大衆化に与する落伍者と見なされていったのだった。

（3）芸術家による制作指導やワークショップ等々は、現在では、厳密には「芸術療法」の範疇に入れられない。とりわけ「芸術療法士」が国家資格として成立している欧米においては、エビデンスとしての測定可能な「治療効果」が重視される。現在、一般に「芸術療法」では、制作の巧拙は度外視されることが多く、また、「名画・名作の鑑賞」といった「美的享受」による心理的効果といった側面も希薄である。

（4）上述のような歴史的経緯と現状を考えると、いわゆる「芸術学」と「芸術療法」という 2 者を単純に対峙させ架橋しようとするのではなく、第 3 の視点、例えば「社会改革的な福祉」の視点を導入することが有益であろうと思われる（論文①）。
　すると、むしろ芸術療法の隣接領域、例えば精神科医療に関わる地域コミュニティにおける芸術の利用（フランスのリールの例：論文③、ロンドンの「アンチ・アートセラピー」の例：論文⑤）や、障害者福祉施設における芸術創造（論文②）に、芸術療法の効果効能をいかに活かしうるか、またそれらの成果を、今後新たに可能性を拡大していこうとする芸術療法に、いかに反映させていくかを考えていくべきではないかと思われる。

（5）関西のアートセラピストの連携や情報交換を行う場として、「甲南アーツ＆セラピー研究会（KAaTsg）」を創設した。少年刑務所、医療現場など異なる現場から実践家を招聘して講演会・勉強会・ワークショップを重ねることで、芸術療法の諸相を知ることができたのだが、この研究会を今後も継続し、芸術療法の情報ネットワークの拠点としていきたいと考えている。

（6）甲南大学人間科学研究所で年間 2 回程度のアートワークショップ「甲南アトリエ」を実践プログラムとして定例化することができた。「甲南アトリエ」は、芸術療法士と芸術家と芸術学研究者が協同で企画運営し、地域住民と芸術療法に関心のある学生や初学者等から参加者を募って、だれでもが体験的に学び語れる「場」となった。今後もこのペースで定期的に開催していく予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　51 件）
①西欣也、アブノーマルな創造をめぐる三つの眼差し、『科研「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」成果報告書』、査読無、2018、pp. 6-13

②服部正、障がい、パラリンピック、アール・ブリュット、そこに治療はあるのか、『科研「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」成果報告書』、査読無、2018、pp. 14-23

③三脇康生、フランスのリール東セクターにおける精神医療へのアートの導入について、『科研「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」成果報告書』、査読無、2018、pp. 32-39

④市来百合子、日本のアートセラピーの風景とこれから－アメリカのアートセラピーの発展から何を学ぶか－、『科研「芸術学と芸術療法の共有基盤形成に向けた学際的研究」成果報告書』、査読無、2018、pp. 68-73

⑤川田都樹子、ロンドンの「アンチ・アートセラピー」、『民族藝術』、査読無、33 号、2017、pp. 248-249

⑥川田都樹子、「失語症」と／の芸術表現―ベケット、チェイキン、クルターグをめぐって、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』、査読無、vol.17、2016、pp. 73-94、https://konan-u.repo.nii.ac.jp/?action=repository_action_common_download&item_id=2839&item_no=1&attribute_id=22&file_no=1

⑦川田都樹子、『赤の書』公刊によるユング再解釈の動向と美術界での反応、『シェリング年報』、査読無、vol.24、2016、pp.5-17

⑧石谷治寛、ウィリアム・ケントリッジによるドイツ領南西アフリカへの＜喪の労働＞、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』、査読無、vol.17、2016、pp.124-158、https://konan-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2842&item_no=1&page_id=40&block_id=38

⑨石原みどり、兼子一、エンパワメントとしての市井のアートセラピー活動―全国実態調査から見えるその内発性と自律性、甲南大学人間科学研究所紀要『心の危機と臨床の知』、査読無、vol.16、2015、pp.105-130、https://konan-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2818&item_no=1&page_id=40&block_id=38

〔学会発表〕（計　26 件）
①西欣也、死の lyricism と不死の realism：戦争詩をめぐって、シンポジウム「戦争文学のトラウマ」（甲南大学ネットワークキャンパス東京）、2017

②三脇康生、フランスの精神医療保健福祉でのアートの活用、あるいは、芸術という質と

精神医療保健福祉 －ラ・ボルド病院とリール東セクターを例として、第 45 回 西日本芸術療法学会、2016

③服部正、障がい者の創作に＜美術＞は何を期待しているのか、民族藝術学会西支部研究例会、2016

④川田都樹子、『赤の書』公刊によるユング再解釈の動向と美術界での反応、日本シェリング協会第 24 回大会（シンポジウム「神話と象徴」）、2015

⑤石谷治寛、戦争神経症と映画表現――アベル・ガンス映画に見るトラウマ表現、トラウマティックストレス学会、2015

⑥石原みどり、アートセラピーの全国実態調査（１）日常生活圏域に拡がるアートセラピー活動の現状について、第 46 回日本芸術療法学会、2014

⑦市来百合子、認定描画療法士研修会・ワークショップ 学市来百合子 校臨床で使える描画ワークシートによる支援、描画テスト学会 第 23 回大会、2013

〔図書〕（計　16 件）
①矢原繁長、星川陽二、川田都樹子、市川薫、妹尾次郎、東田出版、『オブジェ「思考」―時空の表象―』、2017、64(25-33)

②服部正監修、服部正、ヒラー・シュタトレ、ダニエル・バウマン、河田亜也子、柚花文、国書刊行会、『アドルフ・ヴェルフリ 二萬五千頁の王国』、2017、232(195-199)

③渡辺亜由美、服部正、山口真有香、斉藤圭、文化庁・滋賀県立近代美術館、『生命の徴―滋賀県と「アール・ブリュット」』、2015、112(11-16)

④山本和人（編）、松本直美（編）、岡田修二、アンソニー・プライアー、三脇康生、ジョン・レヴァック・ドリヴァー、千速敏男、廣瀬浩司、松本直美、稲賀繁美、松嶋健、要真理子、ナカニシヤ出版、『自然学―来るべき美学のために』、2014、195(38-51)

⑤服部正、藤原貞朗、名古屋大学出版会、『山下清と昭和の美術―「裸の大将」の神話を超えて』、2014、523（523 全頁共同執筆）。

〔その他〕
ホームページ等
甲南大学人間科学研究所「甲南アトリエ」
http://www.konan-u.ac.jp/kihs/event/lecture/2567/

６．研究組織

(1)研究代表者
川田　都樹子（KAWATA, TOKIKO）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：00236548

(2)研究分担者
三脇　康生（MIWAKI, YASUO）
仁愛大学・人間学部・教授
研究者番号： 40352877

服部　正（HATTORI, TADASHI）
甲南大学・文学部・准教授
研究者番号：40712419

西　欣也（NISHI, KINYA）
甲南大学・文学部・教授
研究者番号：70388750

(3)連携研究者
石谷　治寛　（ISHITANI, HARUHIRO）
京都市立芸術大学・芸術資源研究センター・非常勤講師
研究者番号：70411311

市来　百合子（ICHIKI, YURIKO）
奈良教育大学・次世代教員養成センター・教授
研究者番号：30285548

今井 真理（IMAI, MARI）
四天王寺大学・教育学部・教授
研究者番号：20413453

(4)研究協力者
安齋　順子（ANZAI, JUNKO）
浦和大学・非常勤講師

石原　みどり（ISHIHARA, MIDORI）
ATAS ラボラトリー研究員

小林　昌廣（KOBAYASHI, MASAHIRO）
情報科学芸術大学院大学・メディア表現研究科・教授

高岡　智子（YAKAOKA, TOMOKO）
龍谷大学・社会学部・講師

内藤　あかね（NAITOU, AKANE）
甲南大学・文学部・非常勤講師

宮川　貴美子（MIYAGAWA, KIMIKO）
甲南大学・文学部・非常勤講師

畑中　麻子（HATANAKA, ASAKO）
（元）甲南大学大学院・博士課程（単位取得退学）